



JEACS

福音讃美歌 ジャーナル

2021.12 vol.32

ハイパーリンク付 PDF 版



CONTENTS

日本語讃美歌作詞の方法論	中山信児	Page
本の紹介		1
『詩編をよむために』		6
『詩編〈抜粋〉一主は王となられたー』		

Japan Evangelical Association
for Congregational Singing

日本語讃美歌作詞の方法論

福音讃美歌協会理事長 中山信児

■ 讃美歌とは、礼拝とは、会衆とは

まず、讃美歌とは何かを考えたいと思います。これは普遍的な定義ではなく、あくまでもこの小論の前提です。讃美歌とは、礼拝で会衆が共に歌う信仰の歌です。礼拝と言うときに、教会にも、礼拝の形式にも様々な多様性があるということを念頭においていただきたいと思います。次に、会衆は礼拝に集う人たちのことですが、年齢、性別、職業、教育、信仰歴、素養、嗜好、様々で、ここにも多様性があります。そこには、譜面が読めない人、声出すのが得意ではない人、小さな子どもからお年寄りまでいて、皆が会衆です。そのような会衆が「心を一つにし、声を合わせて歌う」ことができる讃美歌が求められています。

■ 「Jesus Loves me」の歌詞

多様な会衆が歌う讃美、それは音楽の面でも歌詞の面でも言えることです。現在、讃美歌として残っているものには「心を一つにし、声を合わせて歌う」ための配慮が良くなされているものが多くあります。一例として「主われを愛す Jesus Loves me」の原詞と訳詞をいくつか見たいと思います。

1. Jesus loves me this I know, For the Bible tells me so;	7.7
Little ones to Him belong They are weak, but He is strong.	7.7
(Refrain)	
Yes, Jesus loves me! Yes, Jesus loves me! Yes, Jesus loves me!	5.5.5
The Bible tells me so.	6

2. J.N. クロスビー訳 (明治5年 1872年)
- | | |
|-----------------------------|---------|
| エスワレヲ愛シマス、サウ聖書申シマス | 10.10 |
| 彼レニ子供中、信スレバ属ス | 8.8 |
| ハイエス愛ス、ハイエス愛ス、ハイエス愛ス、サウ聖書申ス | 7.7.7.8 |
3. ヘンリー・ルーミス、奥野昌綱訳 (明治7年初期)
- | | |
|-----------------------------|---------|
| 耶蘇我ヲ愛ス 聖書ニソ示ス | 8.8 |
| 婦スレバ子たち 弱キモツヨイ | 7.7 |
| ハイ耶蘇愛ス、ハイ耶蘇愛ス、ハイ耶蘇愛ス、サウ聖書示ス | 7.7.7.8 |
4. ヘンリー・ルーミス、奥野昌綱訳『教のうた』11 (明治7年12月)
- | | |
|-----------------------------------|---------|
| エスわれをあいす せいしよにぞしめす | 8.8 |
| きすれば子たち よわきもつよい | 7.7 |
| あゝエスあいす あゝエスあいす あゝエスあいす せいしよにぞしめす | 7.7.7.8 |
5. 『讚美歌』461番、『教会福音讚美歌』52番
- | | |
|-----------------------------|---------|
| 主われを愛す、主は強ければ、 | 7.7 |
| われ弱くとも 恐れはあらし。 | 7.7 |
| わが主イエス、わが主イエス、わが主イエス、われを愛す。 | 5.5.5.6 |

各行の右側には、英語の場合はシラブルの数、日本語訳の場合はモーラ (拍) の数が書かれています。モーラについては後で説明しますが、とりあえずカナの数と覚えていただけたら良いでしょう。俳句で五七五というのもモーラを数えているのです。さて、原詞の "Jesus loves me, this I know" を指折り数えると、シラブルの数は7つになります。各行について右側の数字を確認してみてください。

■日本語訳の変遷

原詞の次に日本語の訳を年代順にあげました。まず、J.N. クロスビー訳 (明治5年、1872年) ですが、これは邦訳された最初の讚美歌でもあります。冒頭の「エスワレヲ愛シマス」はモーラの数で10。「サウ聖書申シマス」も10。それぞれ数えると10.10.8.8.7.7.7.8です。これを歌おうとすると、歌詞をメロディーにどう当てはめれば良いのか戸惑ったり、歌えると思ったのに途中で詰まったり、ということが出てくると思います。あるいは自分ではちゃんと歌えたと思っても、他の人は違う譜割で歌っていた、ということもでてくるでしょう。原詞の場合は、英語のシラブルと音符の数が、どちらも7.7.7.7で1対1対応しているのですが、日本語訳の場合は、音符が7つしかないところに10のモーラを詰め込もうとするので、どうしても無理が出るのです。自分で自分の歌を歌う場合や、カラオケなどでよく覚えている歌を歌う場合には、一つの音符に2つのモーラを詰め込んだり、節ごとに違う詰め込み方がされていても問題ないでしょう。けれども、普通の人々が教会で初めての讚美歌を歌うような場合、それは難しいことなのです。

以下、翻訳された年代が新しくなるにつれて、この数字が変わってきているのがお分かりいただけるでしょうか。クロスビー訳で最初10.10.8.8.7.7.7.8であったものが、明治七年のヘンリー・ルーミスと奥野昌綱の訳では8.8.7.7.7.7.8となっており、曲の譜割と日本語のモーラを少しずつ近づけようとする流れが見えてきます。5番目にあげた良く知られた翻訳では「主われを愛す」は7、「主は強ければ」も7で、数字を見ていただくと訳詞のモーラの数と原詞のシラブルの数が同じになっています。こうなると初めての人も、歌いやすくなってきます。そして2節3節も1節と同じように違和感なく歌うことができる。こういうことを明治の宣教師たちが日本に来て、日本人と協力しながら、少しずつ整えていったのが、日本語の讚美歌詞の歴史になっています。

■讃美歌の評価について

シラブルやモーラは詞の形に関わることで、歌詞には形だけでなく内容が伴います。ここに挙げた4つの翻訳について、どれが原詞の内容を一番よく表しているのかを考えてみてください。加えて、ことばの勢い、あるいはパワー、訴えかけてくる力についても、実際に歌うことで感じていただきたいと思います。特にリフレインの「ハイエス愛ス、サウ聖書申ス」あるいは「あゝエスあいす せいしよにぞしめす」と、歌い慣れた「わが主イエス、われを愛す。」の、どれが一番インパクトがあるかも考えてみてください。

ところで、「ぎなた読み」についてご存知でしょうか。「べんけいが なぎなたを ふりまわし」は5.5.5ですが、これを無理やり6.9とかに分けると「べんけいがな ぎなたをふりまわし」で意味がわからなくなります。つまり、ことばの意味のかたまりと、ミーターあるいはモーラ、シラブルなどの区切りがちゃんと合っていないと「ぎなた読み」のような意味不明なものになってしまうのです。そして「にわにわにわとりがいる」ですが、こちらは区切り方によって「庭には二羽鳥がいる」がいるのか「庭には二ワトリがいる」のか意味が変わってしまいます。讃美歌でも、時々それで意味を取り違えていました、などという話がありますけれども、讃美歌を作る時には、ことばの意味の句切れとメロディーの句切れを合わせて、区切れによる混乱が生じないようにしなければいけません。

ただし、どんな原則にも例外はあって、ことばとリズムの句切れが合わないようでも、メロディがそれを補完していたり、あるいは前後の文脈で意味が明白な場合などは、不都合を覆うことがあります。ですから讃美歌を評価するときには、全体を通して多方面から総合的に判断することが大切です。ぜひ4つの日本語訳を古いものから順に歌ってみて、歌いやすいのはどれで、歌にくいのはどれだったか、どうして歌いやすかったか、どうして歌いにくかったのかということを考えていただきたいと思います。同時に、歌いやすさへの配慮がどうなされているのか、意味がどう取られているのか、そして歌の力がどこにあるのかということも見ていただき、それらがどう合わさって、その曲に対する評価が高くなり、あるいは、歌いたくなるのかということを経験していただきたいと思います。ただし、これらは全部均等にそろっていないとだめかという、決してそうではなくて、どこかひとつが尖っていたとして、それが人の心を捉えるということは十分あり得えます。そのようなことを考えていただけたら、それが讃美歌の詞について考える第一歩になるのではないのでしょうか。

■モーラ（拍）とミーター（韻律）について

先に少し触れたモーラ（拍）ですが、日本語には一つのカナが基本的に同じ長さで発音されるという特徴があります。実際には緩急や呼吸などの問題がありますが、そういったものを全部削ぎ落とすと、日本語のことばの長さをモーラという形で捉えていくことが合理的になってきます。それから、ミーター（韻律）ということばがあります。意味の広いことばですが、ここでは讃美歌のメロディーの中にある一つのリズムという風に考えていただけたらと思います。讃美歌では譜面にかかっている主旋律の音符のリズムがミーターになります。英米の讃美歌でよく使われるミーターには、「驚くばかりの 恵みなりき Amazing Grace」のように8.6.8.6と数えられるコモンミーターや、8.8.8.8に数えられるロングミーターがあります。実は、先程の「Jesus loves me」は、奇数で7.7.7.7ですから、コモンミーターでもロングミーターでもない、英語の讃美歌としてはちょっと特殊な部類に入ります。

明治期に欧米の讃美歌がたくさん入ってきた時に、日本の文学界は非常に大きな刺激を受けます。なぜかというと、日本のことばのリズムは五七五に見られるように、七五調あるいは五七調が基本です。ところが欧米の讃美歌は8.6あるいは8.8というような偶数のリズムが使われていました。そういう西洋のことばのリズムを非常に感銘を受けて取り入れたのが、例えば島崎藤村だったりするわけです。彼は植村正久の弟子だったことありますが、師である植村正久が翻訳した神への讃美、祈りの歌（『讃美歌』319番、参『教会福音讃美歌』374番）を「逃げ水」という題の恋愛の歌に変えて『若菜集』（1897年）に入れるようなこともしています。それまでの日本文学になかった新しいことばのリズムが、当時の若い詩人たちの心をとらえたという現実があったわけです。

■有節定形讃美歌

私たちが歌ってる讃美歌には多くの場合、1節、2節、3節のような節があります。節が有るから「有節讃美歌」と言います。訓練された歌い手が歌う場合や、一般人でも良く練習して歌う場合は、各節で厳密にことば数が揃ってなくても歌えるのですが、様々な会衆が前提なしに集まって歌う会衆讃美では「心を一にし、声を合わせて」歌うためには、各節でミーターやモーラを揃えることが大切になります。歌詞のモーラと曲のミーターが全節でぴったり合っていると、歌い手は「ことばと曲をどう合わせて歌おうか」というところに頭を使わず、各節ごとに、心を込めてことばを歌うことができますようになります。

ここまで有節讃美歌について説明してきたのですが、実は有節の「定型讃美歌」についても触れていました。8.6.8.6あるいは8.8.8.8のように語数つまり形が定まっていることを定型と言います。詩には定型詩と自由詩があります。私たちが歌っている讃美歌の歌詞の多くは定型詩になっています。それらは、有節讃美歌のすべての節に一定の文字数のパターンがあり、さらに、歌詞を記憶にとどめるために、例えば各行の頭や終わりの語や母音をそろえるというような形で韻を踏むということがなされる場合もあります。

実は、日本では、俳句や和歌のような歌や句を除けば、定型詩の伝統がほとんどありません。日本人が詩という時には、もっぱら自由詩を考えることが多いのです。学校で「詩を書きましょう」と言われたら、教師は次に「何でも心に浮かんだことを自由に書いてごらん」と言うでしょう。自由に書くから自由詩なのです。ことば数や行数も特に定められていないし、俳句には季語とかいろいろありますけれど、学校で詩を作る時にはそういう制約もほとんどありません。欧米には定型詩の伝統があって、かなり厳密な形が定まっています。私も英詩の形については門外漢ですが、そういう形があるということは驚きと尊敬をもって見ています。そのように形が定まっていますので、詩(Poem)がそのまま讃美歌(Hymn)になるということがしばしば起こります。日本の場合はそれはなかなか起こりません。星野富弘さんの詩に曲が付けられるケースのように、シンガーや声楽家の方が歌われる歌としてはありますが、会衆讃美としてはなかなかありません。あつたとしても1節で完結するようなもので、日本人が讃美歌を想定しないで作った日本語の詩が、有節の讃美歌になるという現象はほとんどないのです。

讃美歌の作詞に取り組むということは、信仰的な意味があって、形が定まっており、なおかつ会衆が分かりやすく歌いやすい形に整えられた詩を作るという、非常に制約が多く、難易度が高い仕事に取り組むことです。それは、新しい地平に踏み出すという意味で、とてもエキサイティングなことなのです。

■讃美歌のことばの源泉

讃美歌の詩の内容は当然信仰に関わるものですが、私たちの信仰のことばの源泉は聖書にあります。例えば、祈りの中でも、私たちは聖書の語彙や言い回しを意識的あるいは無意識に取り入れています。「天におられる私たちの父よ」「御名を讃美します」「委ねます」「御心がなりますように」「感謝します」「御名によって祈ります」。どれも聖書から来ています。牧師の説教のことばも、皆さんが信仰の証をする時のことばも、自分の体験を話す時でも、それがみことばとどう関わるかを考えると思います。讃美のことばも同じような意味で聖書のことばがその源泉です。

次に讃美歌と聖書のことばの関係について、いくつかの類型をあげました。讃美歌がみことばをどのように取り入れているかという実例です。

第一は「みことばの歌」です。もう召されましたが教会音楽家の岳藤豪希師は『みことばの歌』という歌集を作っておられました。それは『新改訳聖書』から大体一節、長いもので数節を選んで、そのまま一語一句変えずに、そこに作曲をしたものです。そういった曲が教会学校や礼拝で歌われたのですが、宣教師の方々も、それを喜んで歌っておられたと聞いたことがあります。というのは、曲自体もほぼ一節だけなので、ことばのイントネーションやフレーズなどことばの持つ音楽的要素をそのまま曲にすることができる、それを宣教師の人たちが歌うと、その歌を通して自然な日本語の発声だとか発音だとかイントネーションとかを学ぶことができる、ということで喜ばれたという話を聞いたことがあります。テゼーの讃美歌などにも、作曲の作法としては少し異なりますが、短い一節程度のみことばの歌がしばしば出てきます。

第二に、比較的長いみことばをそのまま歌詞として使う worship 系の讃美歌があります。日本ですと内藤

容子氏のいくつかの讃美歌や、翻訳ですが「神の国とその義をまず第一に求めなさい」などがそれに当たります。少し長めのみことばをほとんど手を加えないで歌詞とし、そこに有節で曲をつける型です。

第三に「ジュネーブ詩篇歌」のように、みことばを韻律化して曲をつけたものがあります。カルヴァンは教会で歌われる讃美は、人のことばではなく神のことばであるべきだというポリシーを持っていたので、聖書の詩篇を韻律化していきます。先にミーター、シラブル、モーラの説明をしましたが、音楽として節に分けた時に、会衆がよく歌えるようにことばを整えていくことをしました。『聖歌』の一番最初のところに「歌う詩篇」というセクションがありましたが、そこに収録されていたのが「ジュネーブ詩篇歌」です。

第四に、みことばを釈義し、意味を掘り下げて、その時代の会衆にも分かるようにパラフレーズして歌った讃美歌があります。ルーターの「神はわがやぐら」も詩篇を基にしなが、その時代に即した讃美歌として整えたものです。

第五に、聖書の中の物語、例えばクリスマスの博士や羊飼いの物語、あるいは受難のイエスやイースターの弟子たちと主の物語などを、一つのストーリーとして讃美歌の節に当てはめて作った讃美歌もあります。

聖書のみことばはいろんな形で讃美歌の中に取り入れられていて、ここに挙げなかったものでも、すべての讃美歌のもとには聖書のみことばがあります。実は今回応募された讃美歌を推敲する段階で「あなたの讃美歌の詩は、どのみことばに基づいているのか考えてみましょう」というレスポンスをしたものが何件ありました。みことばが私たちの血となり肉となるという素晴らしいことがあって、讃美の歌詞が生まれるのですが、それでも私たちの心に自然に浮かんだことばが、どこかで人のことばと混ざり合ってしまうということがあります。そういう時に、もう一度、このことばはどこから来たのか、このフレーズは、この意味は聖書のどの箇所から汲み上げてきたものなのかということ、自覚的に掘り下げていくことで、歌詞の意味がギュッと締まるということがあります。あるいは焦点が、個人的な証しから、より公同性のある信仰の歌に合わせられていくということがあります。これから讃美歌の作詞をなさる方々にも、ぜひ、みことばと真摯に向き合い、みことばを自覚的に讃美のことばに取り入れていただきたいと願うものです。

■聖書のことばの力

クリスチャンであれば、自分が日頃使っている聖書があるでしょう。「新改訳」にしる「共同訳」にしる、それぞれに個性があって語彙や言い回しが若干違っています。日本語の聖書は「元訳」「文語訳」「口語訳」「新改訳」「共同訳」のように進展してきました。『聖歌』や古い『讃美歌』のポキャブラリーには「文語訳」あるいは「口語訳」の聖書からきているものが、けっこう多くあります。私たちは、そういう意味で、各々が今使っている翻訳聖書から汲み上げたことばを大切に使用していただきたいと願っています。

最後に聖書のことばが社会に大きなインパクトを与えたことについて少し説明したいと思います。アガペーというギリシャ語は、日本語聖書で「愛」と訳されています。私たちはそれが神の愛であり、神からの無代価の愛であると理解しています。よく知られているように「愛」を表すギリシャ語には、他にエロース（性愛）、フィリア（隣人愛）、ストルゲー（家族愛）があり、それぞれ違った愛を表しています。そして聖書はアガペーを「愛」という広い概念の中心に据えてきました。これによって、日本語の「愛」という概念にもアガペーの意味が加えられるようになったのです。辞書で調べると、もともと日本語における愛の意味は、性愛の他、親子兄弟の間の愛、あるいはものを大切にしたり執着する愛、愛想とか愛嬌などがありますが、神の愛や無代価の愛という意味はありませんでした。けれども、今「国語辞典」にはアガペーの愛の意味が載っているのです。聖書のことばが、日本語のことば、そして私たち日本人に与えた影響は、とてつもなく大きかったのです。次に、ことばが新しいつながりを持つことについても見ておきましょう。「天」と「父」と「神」をつなげるのは、やはり聖書の専売特許でしょう。あるいは「隣人」と「愛」をつなげたのも、「命」といういつか死んで消えるはずのものと「永遠」をつなげたのも、聖書の大きな功績です。

聖書はことばの面でも非常にインパクトのある書物です。私は聖書こそ世界で一番ラディカルな本だと信じていますが、それは同時に福音の素晴らしさを信じることでもあります。その福音を信じる者たちが「心をつなげて、声を合わせて」歌うために、讃美歌の創作あるいは讃美歌集の編集という困難な事業に取り組み、新しい讃美を生み出す人たちが、この日本にさらに多く起こされることを祈ります。

本の紹介

聖書協会共同訳 詩編をよむために

日本聖書協会

2018年に「礼拝での朗読にふさわしい、格調高く美しい日本語訳」を目指して出版された『聖書 聖書協会共同訳』ですが、その特徴が最もよく表れている「詩篇」を味わうための入門書として、本書は企画されました。本書には以下の5編が収められています。

- ①「詩編の基礎知識 構成、技法、研究史、そして……」飯謙
- ②「詩編に親しむ 心に泉を」春日いづみ
- ③「川のある風景」石川立
- ④「天を仰いで神に歌う 悲しみ、嘆き、報復の詩がなぜ詩編にあるのか」石田学
- ⑤「詩編を日本語で味わう『典礼聖歌』を手がかりとして」西脇純



入門書とはいえ、いずれも専門の立場から深い掘り下げがなされており、読みごたえのある一冊となっています。以下、各論の内容を概観しましょう。

- ①では、ヘブル詩の技巧や類型について簡潔に解説されています。「平行法」や「交差配列」についての知識や、「賛歌」と「嘆きの歌」の差異の認識は、詩編を読み進め、理解する上で大いに助けになるでしょう。
- ②では、文学や文芸との関わりで詩編について語られますが、著者は日本語担当として「朗読にふさわしい、格調高く美しい」訳語を見出すために腐心された歌人です。歌人らしく斎藤茂吉や葛原妙子についても言及されています。鋭角に切り取られた硬質なことばを紡ぐ葛原妙子の歌は、ある種の詩編と強い親和性を持っています。
- ③では、芸術（ミレー）や思想（パスカル、森有正）との関わりについて触れられています。また、ダイバーシティ（多様性）の観点からの詩篇の読みについても論じられています。
- ④では、悲しみ、嘆き、報復の詩について論じられています。おそらく聖書の中で嘆きや報復について、最も赤裸々に語られているのは詩編でしょう。それだけにつまずきになったという話もしばしば聞きます。その読み方、その意義について正面から取り組んだこの小論は、詩編を読みすすめる上で必読の一編であると言えるでしょう。
- ⑤は、カトリックの歴史の中で、グレゴリオ聖歌から日本の典礼聖歌にいたるまでの伝統がどのように受け継がれてきたかが論じられています。旧約の時代から詩編は歌われてきました。そこには歌うことを通して味わえる深い深みがあります。



詩編〈抜粋〉—主は王となられた—

聖書を読む会

本書は日本聖書協会の『詩編をよむために』に合わせて出版された、グループで聖書をよむためのテキストです。聖書活用を目的とした共同企画の提案が、日本聖書協会から聖書を読む会にあったことから、本書が生まれました。ここでは『聖書 聖書協会共同訳』から13の詩編とその手引が収録されています。また『聖書 新改訳2017』の読者にも使えるような配慮がなされています。本来は、グループで用いることを想定して作られたテキストですが、個人で聖書を深く学ぶためにも有益です。

詩編に関わる2冊の本の出版を通して、詩編がより深く読まれるとともに、私たち自身の信仰の歌として広く歌われるようになることを心から願います。

会計報告

2021年4月～2021年9月

■収入の部■

科 目	2021 年度予算	2021 年度中間報告
会員負担金	1,060,000	930,000
(正会員)	(750,000)	(750,000)
(準会員)	(60,000)	(60,000)
(賛助会員)	(250,000)	(120,000)
自由献金	450,000	11,000
積立金取り崩し	100,000	0
特別収入	0	0
その他	0	1
当年度収入合計 (A)	1,610,000	941,001
前年度繰越金	1,419,062	1,419,062
収入合計 (B)	3,029,062	2,360,063

■支出の部■

科 目	2021 年度予算	2021 年度中間報告
理事会費	54,000	30,274
委員会費	270,000	35,585
人件費	360,000	210,000
事務費	264,500	138,639
ジャーナル発行費	180,000	51,202
カンファレンス開催費	100,000	30,000
総会開催費	15,000	0
JEA 関係費	90,000	6,000
経常支出合計	1,333,500	501,700
特別支出 積立金	100,000	0
予備費	132,500	0
当年度支出合計 (C)	1,566,000	501,700
当年度収支差額 (A) - (C)	44,000	439,301
繰越額/残高 (B) - (C)	1,463,062	1,858,363

●賛助会費納入者・献金者一覧 (2021年4月～2021年9月)

個人: 斉藤真木子、菅原早樹、山村雅彦、石川岩夫、林慎一郎・頼子、中山信児、本間昭弘、匿名 (8件)
 教会: キリスト教朝顔教会、都賀キリスト教会、武蔵台キリスト福音教会 (18件)

お名前掲載を希望されない場合は、通信欄に匿名希望とお書きくださるか、メール (info@jeacs.org) で、その旨をお知らせください。

冬期献金のお願い

いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。ルカ 2:14

主にある皆さま

聖い主の御名を讃美いたします。

いつも福音讃美歌協会のためにお祈りとご支援をいただき感謝します。

今年は、私たちにとっても初めての試みでしたが、Zoom 開催の「福音讃美歌 WEB セミナー」を 2 回行いました。統一テーマは「讃美歌詞と讃美歌創作」。第一回セミナー（6/26）では、岩淵まことさん、神山みささんをゲストにお迎えして「パネルディスカッション」を行いました。セミナーと連動して、讃美歌詞を公募しましたが、そこには 10 名を超える方々が応募され、多くの優れた作品が提出されました。その中から 3 つの優秀作品が選ばれ、第二回セミナー（11/16）で発表されました。セミナーの様子は JEACS の [YouTube](#) チャンネルでご覧いただけます。

さらに、来年に向けて現在 3 つのプロジェクトが進行中です。

- ①『『教会福音讃美歌』奏楽音源』の発売。
- ②『あたらしい歌 3』の出版。
- ③各種セミナー（作曲、著作権）の開催。

★今回、特に『『教会福音讃美歌』奏楽音源』（USB メモリ）のための献金を受け付けております。一流演奏者による演奏で、『教会福音讃美歌』と『あたらしい歌 2』に掲載されている 546 曲の奏楽音源を USB メモリに収録します。全曲のメロディーと伴奏を聴くことができるので、讃美歌選曲の助けに、奏楽や聖歌隊の練習に用いることができます。このプロジェクトでは、韓国の演奏者、エンジニアが日本宣教への祈りをもって協力してくださっています。いのちのことは社から 2022 年上半期に発売予定です。詳細は近日中にご案内いたします。

これらの働きはすべて、日本の福音的な諸教会の礼拝と讃美の振興のために必要な働きです。そして、その働きを支えるのは皆様の祈りと献金です。また、正会員、準会員、賛助会員としてお支えくださる方々も引き続き募っております。ぜひご検討ください（詳細は[こちら](#)）。皆さまの上に主からの豊かな祝福をお祈りいたします。

福音讃美歌協会 理事一同

◆郵便振替口座◆

番号 00220-1-95127
名称 福音讃美歌協会

◆ゆうちょ銀行口座◆

〇一八店 普通 7252410
一般社団法人 福音讃美歌協会

■福音讃美歌協会 ◆賛助会員募集

- ・「賛助会員」は、福音讃美歌協会の趣旨に賛同し、支援して下さる教会や個人の会員です。
- ・賛助会員のお申し込みは、福音讃美歌協会までメールか F A X で入会申込書をご請求ください。
- ・賛助会員の年会費は、一口 5,000 円で、個人は一口から、教会は二口からでお願いします。
- ・正会員、準会員の詳細については、福音讃美歌協会まで直接お問い合わせください。



福音讃美歌協会 (JEACS)

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 2-1 OCCビル 602号室
Tel.03-5341-6920 Fax.03-5341-6921 (いのちのことは社出版事業部内)
ホームページ <http://jeacs.org/> メール info@jeacs.org
Facebook YouTube チャンネル